

現代版島流し “心を動かすリーダーシップ”

株式会社風と土と 代表取締役
阿部裕志



目 次

概要.....	1
はじめに.....	1
1. どうして海士町で起業をしたのか?.....	2
(1) 生産技術エンジニア時代の疑問.....	2
(2) 海士町との出会い.....	2
2. 海士町と風と土との取り組みは?.....	3
(1) 海士町は何をしているのか.....	3
(2) 海士町の町づくりのキーワード.....	4
(3) 海士町らしい考え方.....	6
(4) 株式会社風と土とは何をしているのか.....	8
(5) SHIMA-NAGASHI～心を動かすリーダーシップ～.....	9
(6) 物語り「ナラティブ」とは.....	9
(7) 腹落ちはどう起きるのか.....	10
(8) SHIMA-NAGASHI の研修内容.....	10
(9) 共感は言葉ではなく、身体共鳴である.....	11
(10) 「食の革命家」アリス・ウォータース.....	11
3. 海士町で何を学んだのか?.....	12
(1) 持続可能な地域づくり.....	12
(2) 「地域づくり」は地域の何を作るのか.....	12
おわりに.....	13

概要

島根県隠岐諸島にある人口 2300 人の島・海士町は、800 人以上が移住し挑戦者が集う島である。NHK「新プロジェクト X」にて 2024 年 5 月放映された。早稲田大学ビジネススクール教授・入山章栄氏は、海士町の地域経営の秘訣を「心を動かすリーダーシップ」だと言う。同氏を監修のもと、海士町経営のエッセンスを、正解のない時代の企業経営に活かす試みについて話していただく。

- 挑戦する島、海士町
- 持続可能な地域づくりの秘訣
- 地域経営と企業経営
- 正解のない時代のリーダーシップ
- 腹落ちした言葉

はじめに

まず自己紹介をする。1978 年に愛媛県新居市生まれ、愛知県春日井市で育つ。1998 年に京都大学工学部入学、工学研究科（材料工学）修士課程終了後、2004 年トヨタ自動車株式会社に生産技術エンジニアとして入社。その後、2008 年に海士町へ移住し、株式会社巡の環（めぐりのわ）を創業し、2018 年に株式会社風と土とに社名を変更。その他、海士町 100% 出資の AMA ホールディングスの取締役、海士町教育委員会、隠岐國商工会理事を務めている。自身は移住して 17 年、漁業権を取得し船を持ち、自分で潜って採った貝を捌き、美味しい酒と共に島暮らしをしている。

「現代版島流し」について説明する。木戸孝明の末裔に聞いた話によると、幕末維新の本質は脱藩と潜伏と島流しであった。今のシステムから抜け出ると言う「脱藩」、その次のシステムを作る時期を見ると言う「潜伏」。「島流し」とは奄美に流された西郷隆盛の話となる。自分の成すべきは何なのかと自分自身に深く問うて、幕末の維新に向かった。つまり島流しとは究極の内省だということだ。これはこのプログラムにぴったりのネーミングだと思い使用している。

本日はなぜ海士町で起業したのかという話をし、海士町と風と土とがしてきたこと、その上で海士町で何を学んだのかということをお伝えする。

1. どうして海士町で起業をしたのか？

(1) 生産技術エンジニア時代の疑問

①グローバル競争の先に誰が幸せになるのか

トヨタ自動車での生産技術エンジニア時代、一部の勝ち組を頂点としたピラミッドの構造に疑問を持った。より早く／もっと早く／もっと安く／もっともつとという競争の中で、納期を守られて納品された良い設備の背景の陰には、子会社や孫請けの従業員への安全面や待遇面での課題があった。

⇒この競争がグローバル化されさらに広がっていくと、ごく一部の勝ち組が周りを蹴落として、たくさんのピラミッドの構造ができていく。その先で誰が幸せなのかという疑問が浮かんだ。

自分の周りで人間的に素晴らしいと思う人を見ても、そのやり方から抜けられていなかった。仮に自分が社長になってこうしたやり方を廃止しようとしても、行き過ぎた競争社会を是とするままでは、世の中は何も変わらないのではないかと思った。

②競争の力から共創の力へ

そうした中でピラミッドの縦の関係性、つまりヒエラルキーによる競争の力で強くなるという世界観が本当に強いのかという疑問が湧いた。よりフラットな横の関係性、つまり信頼ベース、共感ベースにして、共に創るという共創の力の方が、結果的にさまざまなイノベーションが起き、人の力が発揮されるのではないか、そんな未来を信じられる希望をつくりたいと思うようになった。

(2) 海士町との出会い

そうした疑問を感じていた時に友人から「面白い島があるよ」と教えられ、海士町を訪問した。

図1は海士町とはどのような島かと聞いた当時、20年前のスライドだ。それまでの高度成長社会とこれからの持続可能な社会を表している。

①高度成長社会(図1左) 高度経済成長期を船にたとえると、先頭に巨大なアメリカ船があり、東京を先頭にした日本という小舟の船団がその後ろに続いていた。海士町は最後尾だといわれていた。

②持続可能な社会(図1右) 高度成長社会からこれからの持続可能な社会へと価値観が移り変わると、海士町の立場は逆転するのではないか。つまり、人と人が助け合うことや自然と共に生きていくという価値観を使い、最後尾だった小舟が世界をけん引するタグボートになっていく。

この①②の話をも島の人たちが言っていると聞き、気概を感じ、共感して移住した。